飯島先生との出会い

村　越　行　雄

飯島先生と初めて会ったのは、私が専任教師として跡見学園女子大学文学部英文学科に所属することになった平成元年４月のことである。正確には、その年の入試を手伝ったこともあって、２月ということになる。それはともかくとして、年号が昭和から平成に変わった最初の年であったこともあり、英文学科の先生方との出会いは、劇的とは大袈裟であるが、印象深いものであった。その中にあって、飯島先生は、いつも物静かで、話す時には必ず笑顔になり、優しく、平和的な人柄であると思った。あれから12年が過ぎ、あっという間の12年が非常に短く感じるが、話す時に笑顔になるという第一印象は、この12年間全く変わらず、まさに話す時に笑顔になるという癖であると確信するに至った。先生の人柄の良さを示す癖であると言っていいであろう。癖と言ったのは、どのような状況でも、良くても悪くても、たとえ激しい言い合いであっても、いつも話す時に笑顔になるので、失礼だとは思ったが、どうしても気になったことがあり、先生に聞いたことがあるが、気付いていないという返事が返ってきたからである。12年間変わらぬ笑顔に接した私にとっては、思い出として最初に浮かぶことである。

次に思い出すことは、先生と研究室が１年間同室だった頃、先生が学長で、私が入試広報部長であった２年に及ぶ執行部時代、長野・茅野にある先生の別荘に泊まった時、その他数えれば切りがない程の機会に、先生と二人きりで、数人の同僚と一緒に、多くの仲間の中で、よくしたこと、つまりお酒を飲んだことである。酒の席で、実に様々なことを先生と話したことを思い出す。勿論、話す内容よりも、笑顔で話しながら、お酒を飲む先生の姿の方が印象的であったが。また、酒の席で、先生の優しさ、思いやりの気持ちを表す姿があった。先生は大変付き合いのいい方で、お酒の誘いを断ることはあまりなく、時々ではあるが、奥さんが食事を作って待っていらっしゃる時でも、付き合っていただくのであるが、家に帰ってから食事を食べるので、酒の肴をほとんど注文せず、気にしながら時計を何度も見ていた姿が

思い出されます。奥さんへの思いやり、そして私達への思いやりの現われであったと言えます。

先生と出会ってからの12年間の思い出は、色々ありすぎて、笑顔と酒だけで済むものではないが、優しく、思いやりがあり、平和的な人柄は、色々な思い出の中でいつも感じることです。あと少しで跡見を去ることになりますが、それは先生との別れではなく、退職後の新たなお付き合いの始まりであると思います。では、お元気で！